

高野清玄先生選評



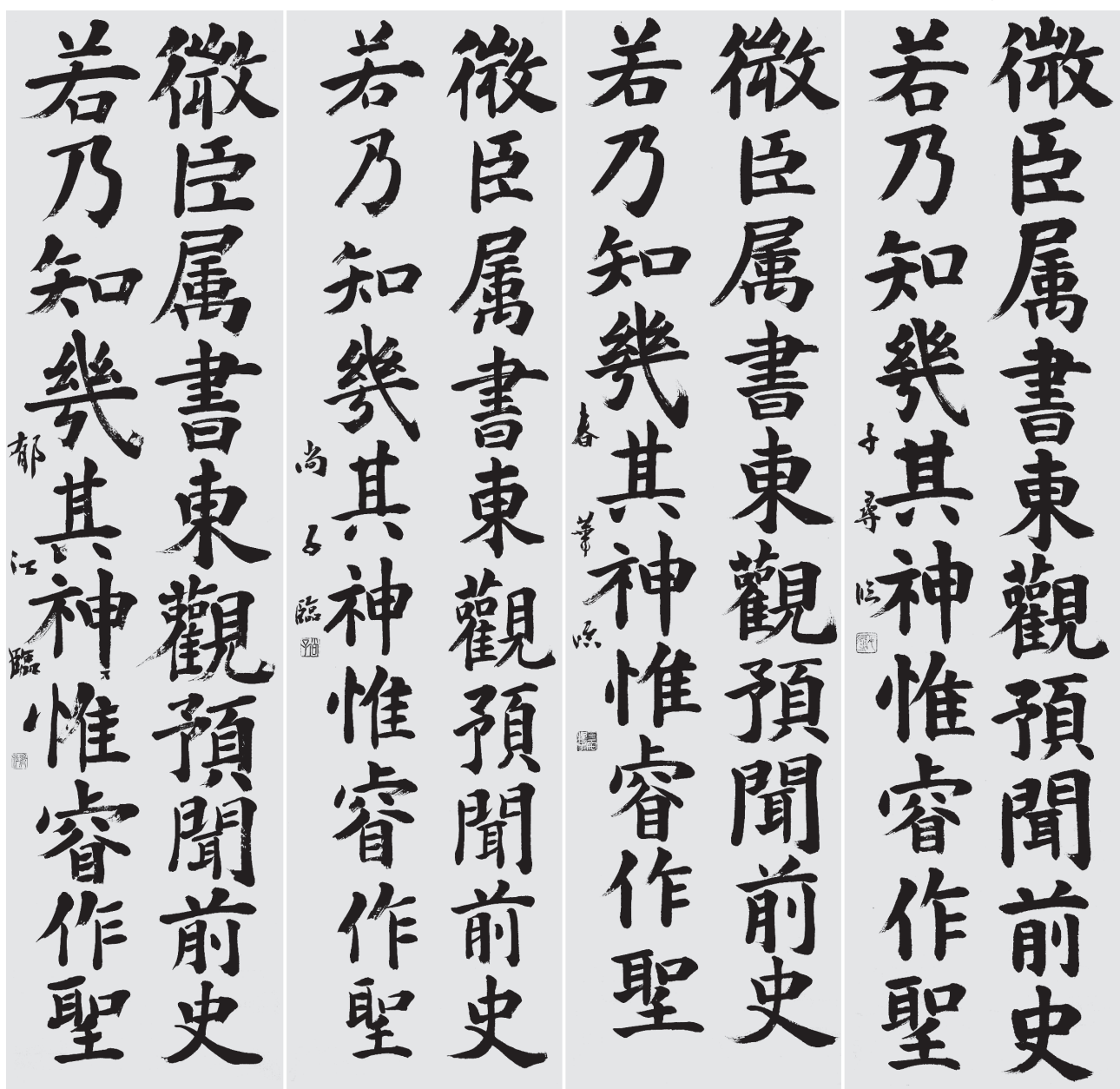
郷間 大悠 推選
墨量たっぷり重厚な温もりある線で運筆されているが暗くならないホッとする佳品である。「秋」と「鯉」への筆圧、黒さと他の軽い筆勢が上手く噛み合って成功した。

大竹 百香 推選
渴筆の躍動感が魅力的である。「み」は軽く「ア」は速度を上げ鋭く、「築」は逆入から筆毛を開き魂を込めた。やや力みある線だが、唯一の見せ場を作品にした。

山根 青坡 推選
宿墨？ながら滲みを効果的に配置した。「秋・築・鯉」の三カ所の三角形のポイントが美しく見せ合っている。片仮名の「インデアン」を軽くし隣に「鯉」も絶妙であり佳作。

福地 廣美 推選
濃墨に羊毛筆で紙面をしつかりとえられている。渴筆は筆と紙との触れ合う感覚を楽しむかの様な運筆で書かれており、正に潤渇の妙が味わい深い作品だ。

葛西玄涛先生選評



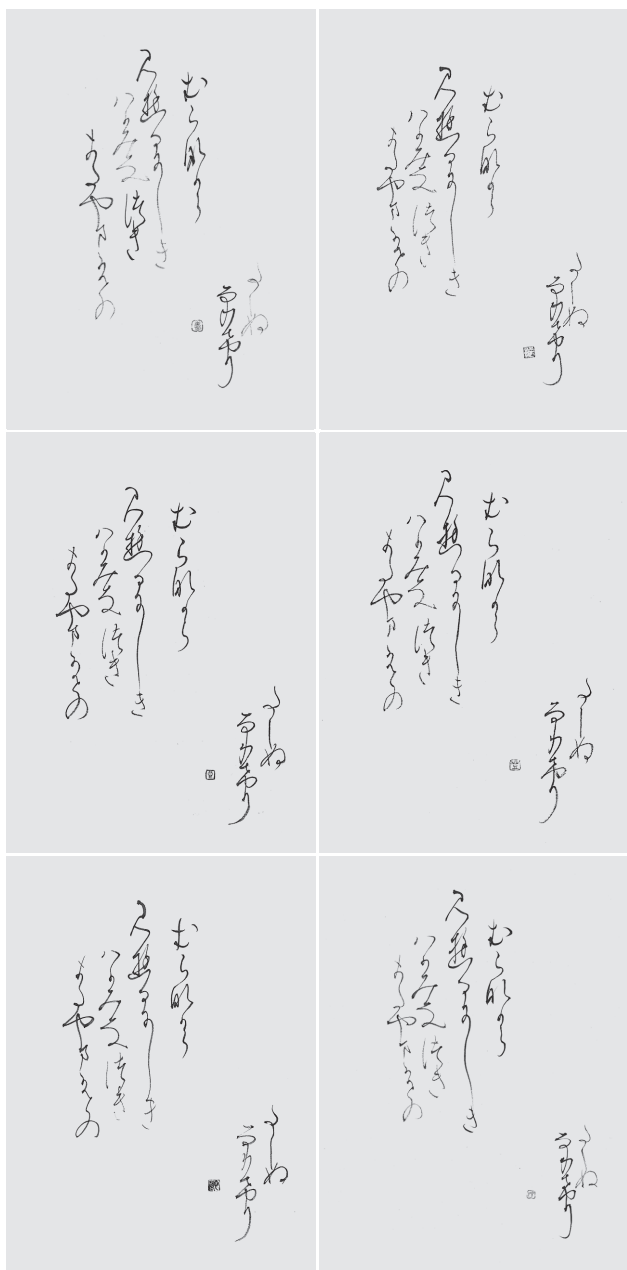
上中千尋 推選
厚みのある線が多くても軽快で明るい空気をたくさん含んでいる。緩やかに少し弧を描く曲線の配置が適切であり、角度が正確で原帖を注意深く観察されている。

三宅春華 推選
繊細な動きと大胆な動きをそれぞれの文字に適度に混入して、静と動の変化を楽しめます。縦長の字形の特徴を巧く表現した二行目の後半が臨書として貴重です。

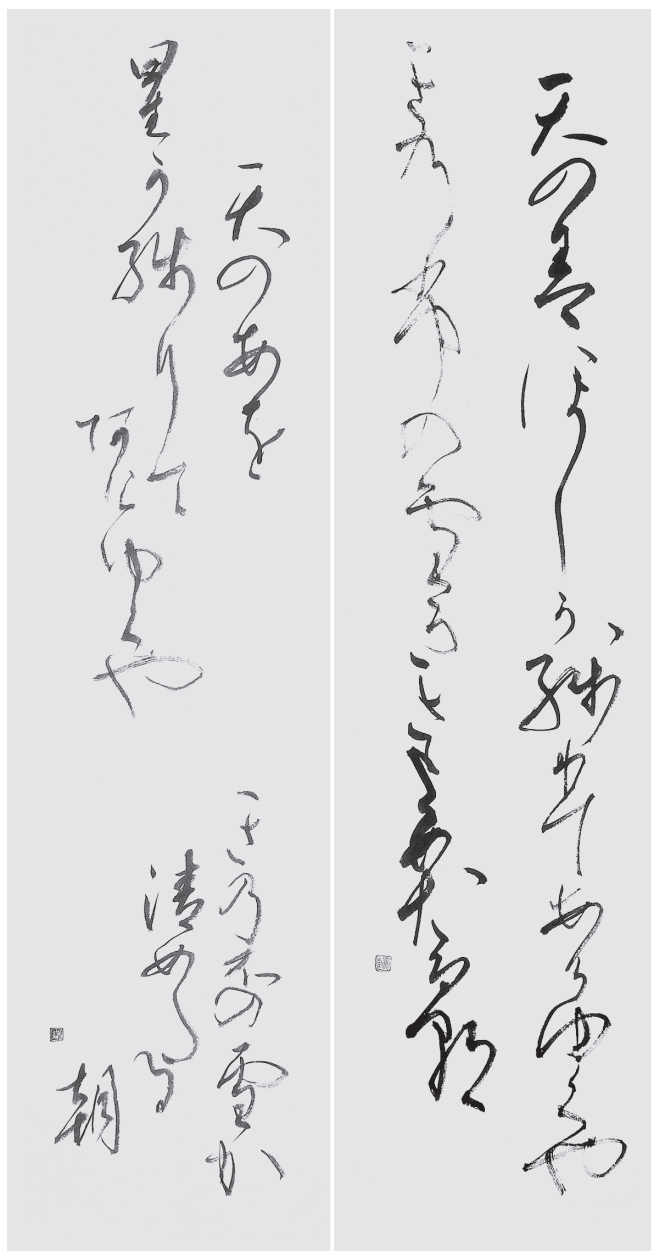
大村尚子 推選
鷗亭先生の参考手本のように縦長な字形であっても字間の余白を多めにし、品格の高い作となった。筆の毛の反発力を有効に生かした強い線が、安定度を高めた。

吉田郁江 推選
起筆の角度などを正しく表現しながらも、大き目の文字と強い線を多くして、迫力で押し切った作です。大きな会場の展覧会作品制作に参考になる臨書作品です。

吉澤真理先生選評



佐々木優子先生選評



時岡寿代 八段
透明感のある切れ味の良い筆線。含墨にも心遣いがあり、自然な潤濁が生まれました。流麗な美しさのある爽やかな作です。

今井良子 七段
堂々とした筆の運びは自信に満ちて滑らかに流れています。墨量の加減に留意されると奥行きが増し情趣豊かになるでしょう。

市来みち子 師範
原帖をよく把握した上での伸びのある線質が美しい。墨色、量共に心した跡が見え、自信の程が窺える魅力ある作品です。

岩本トシ 師範
リズムに乗った躍動感ある運筆表現は力強く習練の成果でしょう。思い切った潤濁の変化を加味されると一段と冴えある作に。

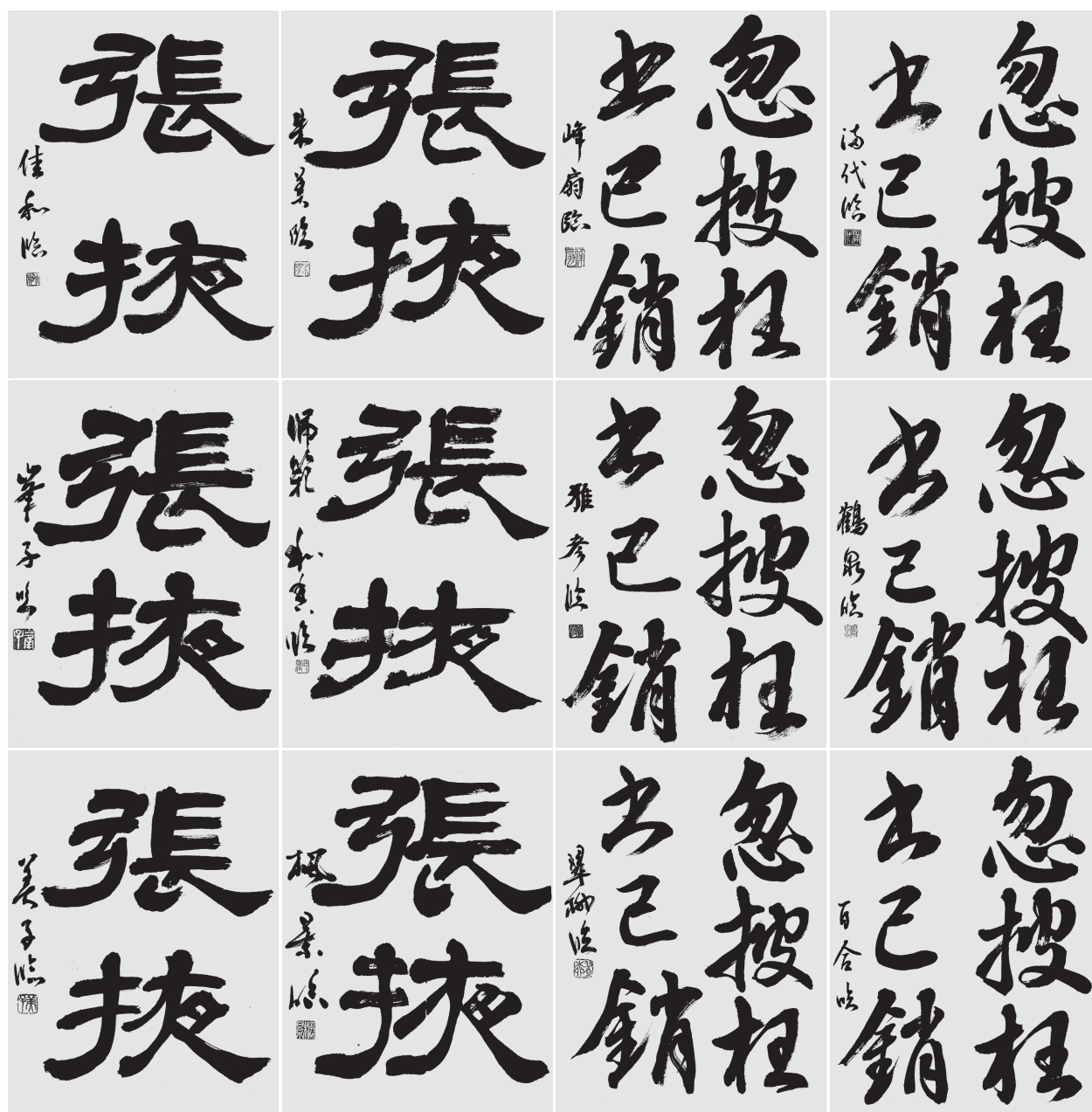
松下晃子 準師
紙面に喰い込むような緩急の変化に富んだ筆運びに好感です。筆先がよく利き、気負いなくきびしさも語れています。

谷村やよい 準六
伸びやかで温かみのある表現に魅力を感じる作です。線質の鋭さを加味されると原帖の円転自在の妙が發揮されます。

清川瑞穂 推選
運腕大きくあたたかな線質で、作品構成巧みにリズムにのり一息で仕上げた作品。中央の白の部分が余韻を残し、爽やかな朝の景色が伝わる作品です。

浅田良子 推選
落筆高く切り込んだ線は清澄な調べを奏で凛とした気品を漂わす。二行目後半、文字を詰め、全体をしつかり締めくくるまとめ方が効果的です。

赤富士北祭先生選評



野田満代 師範
筆路が明快で余白が美しい作品。遅速緩急の変化見事にリズムに乗った運筆が心地よい。羊毛筆を弾ませた姿が目につかびます。

神田鶴泉 準師
筆を大きく振りながら、勇壮な筆致は、空海の書の本質に迫るものがある。清澄さも加わった線に、日頃の古典研究の研鑽が窺われる。

中澤百合 準八
丁寧な法帖を読み取りながら、ふつくと豊かな線を表現した。王羲之系統の線質を理解し書の大道を歩んでいる。押印があればと惜しまれる。

久野峰扇 六段
颯爽とした書きぶりで、白黒の明快な筆致の美しさが見る人に心地よさを与える。気持ちの流れもよく、作品としての一体感も見事に表現した。

森川雅彦 準六
やや濃いめの墨だが、線が良く伸びて風信帖の特徴を捉えている。用紙選択は大切だが、ほどよくにじむものを用いて効果的である。

重富翠柳 三段
写実的な臨書は大切であるが、このように自分の方に引き寄せながら臨書するのも創作への大切なステップでしょう。更に縦画の研究を。

遠藤朱美 師範
原帖のしつとりとした、伸びやかな美しい線をよく表現した。修練による運腕の大きさが根底にあるのでしよう。落款の書きぶりも流石。

井上和香 師範
直線を利かせて、統一感を持たせた作。羊毛筆・羅紋箋を用いて線の冴え著しく作品としての強さがある。用筆に細かな配慮が感じられる。

小松崎楓景 準師
トロツとしたあたたか味のある線は何ともいえず芳醇さがある。線質で観る者を引き込んでいくような魅力がある。落款や小さめにしている。

橋本佳和 七段
丁寧な法帖をみながら、原帖にせまような臨書作。どこまでも続くような右払いの伸びやかさは白眉であり曹全碑らしさに繋がっている。

崔 肇子 七段
運腕大きく書かれ、観る者を元気にさせてくれる。黒さの中にピリツとした雰囲気があり原帖に通じている。横画の終筆を更に一工夫しては。

東谷美子 準四
かな部で御活躍の方。漢字の勉強もされて線を磨いたのだと成果だったのですね。この作は隷書の筆法も素晴らしく、落款にも余裕が感じられる。